社会科学習材開発セミナー　　2014.4.27(月)

M153845 守谷富士彦

【発表題目】

教員養成の指導者＝教師教育者に求められる資質・能力

−二谷貞夫・小林汎・大野一夫・和井田清司・吉田俊弘編『中等社会科ハンドブック』の分析から−

【発表構成】

1. はじめに
2. 教材の理念と構成
   （１）本の特徴・構成からみる理念
   （２）内容からみる教科観・思想
   （３）育成しようとしている教師像
3. その指導者に求められる資質・能力(考察)
4. おわりに

1. はじめに

本発表の目的は、社会科教員養成（pre-service teacher education）のテキストを分析することを通して、その教材の理念と構成、またそれを用いる指導者（教師教育者）に求められる資質・能力を明らかにすることである。本発表では**二谷貞夫・小林汎・大野一夫・和井田清司・吉田俊弘編『中等社会科ハンドブック−＜社会・地歴・公民＞授業づくりの手引き−』学文社, 2013, pp. 1-156**（以下、本書，または『ハンドブック』と略記）を対象とする。

その方法として以下のような手順で行う。２章（１）では本の形態的特徴・章構成の特徴からテキストの理念や構成を、（２）では本書に書かれている内容から教科観や思想を捉える。（３）では（１）（２）をふまえて本書で育成しようとしている教師像、つまり教師教育の目標観を明らかにする。３章では、この教師教育の目標観に即して、このテキストを用いる教師教育者に求められる資質・能力とはどのようなものかについて考察する[1]。

RQ は以下のように設定した。

RQ①:教員養成教材としての本書の理念と構成はどのようなものか？

RQ②:本書が育成しようとしている教師像はどのようなものか？

---

[1] 本発表は、本講義展開１の初回である。そのため展開１の教師教育者に求められる資質・能力については事例分析に留まり、明らかにすることはできないため「考察」とした。

[2] 『教育方法学研究ハンドブック』p.1 より引用。この引用は日本語表記から受けるイメージか

2.　教材の理念と構成

（１）本の特徴・構成からみる理念

本書の理念を明らかにするため、ここでは特徴・構成を捉えたい。その手順として、形態的特徴、章構成の特徴という順に確認し、最後にその特徴から理念と構成を明らかにする。

まず、本の形態的特徴として２点挙げる。

第一に、サイズについてである。見開き B4 サイズと大きめであり、154 ページとあまり分厚くないという特徴がある。これにより、大きいページには図表や写真などの資料が載せやすくなっており、分厚くないため運びやすく手軽さが感じられる。

第二に、どの内容も見開き１ページで完結している点である。そのため、ページをぱらぱらとめくりながらながら内容を捉えることができる。はしがき（資料①）にも「必要に応じ、どこからでも参照していただければ幸いです」[i]とあり、目次から気になった箇所を即時に確認することができる。

次に章構成の特徴を、全体、節、各節内の３つのスケールで捉えていく。全体の構成と節の構成は主に目次（資料②）から、各節内の構成は主に資料⑨⑩から捉える。

全体スケールで捉えると、まずは総論→各論（各領域論）となっている特徴がある。各章の内容を概観すると、第１章は社会科の歴史や学習指導要領の解説と現代的課題の提示、第２章は一般的に授業づくりに必要な知識や技能についての章、第３章以降は授業づくりの視点や方法についてのアイデアがかかれた章となっている。ページ配分では、３分の２が各領域論に割かれており、第３章以降が「中軸」[ii]となっていると言えよう。

節スケールで捉えると、教材やテーマで節が分けられ、「How to」や「idea」がメインとなっている特徴がある。目次全体を概観すると、「どのように」「どのような」「どう」という文字が目に付く。第３～５章の各節の題名は「(題材・テーマ）を…に学習する鍵は？」「(題材・テーマ）をどう学ぶか」「(題材・テーマ)をどう教えるか」「(題材・テーマの授業)をどうつくるか」となっている。本書の「授業づくりの手引き」という題名もこの特徴を表しているだろう。

各節内の構成スケールで捉えると、主に３点の特徴がある。

第一に、節内で２～４つほどに分割され、各節一人の執筆者が担当しており、各節での参考文献や注、用語解説がある点である。この特徴からも見開き１ページ完結の形態が伺える。

第二に、第３～５章の各論では「各授業テーマ→教材研究のポイント→授業づくりのヒ

ント」となっている点である。しかし、その内容はあくまで教材研究のヒントやアイデアの提供に特化しており、具体的な学習指導案は載っておらず、その節をみれば授業がつくれるようになれるというものでは無いと感じた。

第三に、資料が豊富な点である。各節のほとんどに図表が載っており、具体的な実物教材の様子を知る事ができる。

以上のように、形態的特徴、章構成の特徴を確認してきた。ここから、テキストの理念と構成について、ハンドブックとしての要素が強い点が明らかになった。ハンドブックとは「手軽で役立つ便利で軽い書物といったもの」[2]である。本書は「大学の教科教育法のテキストで活用可能なかたちで編集して」[iii]おり、用途としては教科教育法のテキストとして利用できるほか、現場の教師に対する教材研究ハンドブックという性格もある。これは、授業づくり演習を主とする指導法の授業用の『中等社会科の理論と実践』と住み分けしている点からも分かり、『ハンドブック』は教育実習などで必要な授業づくりの実践力のための特効薬的な性格はなく、あくまで教材研究や授業づくりにおいての「How to」を意識した理念・構成となっている。

（２）内容からみる教科観・思想

本書の教科観・思想を明らかにするため、主に資料④～⑦の内容の特徴を捉える。主に、３点の特徴を捉えた。

第一に、子どもに現代的な基本問題に肉薄する知の探究をさせるという考えがある点である。このことは以下のような内容から捉えられる。まず、中等社会科の定義と目標観である。資料④では本書での中等社会科の定義を、中学校社会科、高等学校地理歴史科、高等学校公民科の３諸教科としている。中等社会科の目標については、学習指導要領の目標を示した上で、1960 年版高校社会科の目標を引用し、その「＜科学的＞＜合理的＞＜批判的＞まなざしは、むしろ今日の社会問題を探究する際に重要な視点といえる」[iv]としている。次に、編集者の願いとして「現代社会の基本問題を明らかにし、それらの課題にせまる中等社会科の創造をめざし」ている点である。資料③では、21 世紀の社会科教育の重要課題を「21 世紀の現在世界で起こっている諸問題を「持続可能」の視点から教材化すること」「現代世界がかかえる諸問題を「歴史的観点」から探究できるように、現代史の学習をすべての子どもに保障すること」「講義中心の学習から参加型学習に転換すること」の３点を挙げている。最後に、資料③の中等社会科の代表的な実践例である。そこに挙げられてい

[2] 『教育方法学研究ハンドブック』p.1 より引用。この引用は日本語表記から受けるイメージからの定義であり、ラテン語のマニュアルに由来する手引書・案内書としての意味もある。

るのは、日本生活教育連盟の初期社会科後期の実践や歴史教育者協議会の実践が主である。文章中では、無着成恭『山びこ学校』吉田定俊「水害と政治」田中裕一「日本の公害−水俣病−」が取り上げられている。これらの共通点は、教師自身が社会問題を自分の問題として引き受け、強い使命感をもって授業実践を臨み、生徒自身に解決を考えさせる実践という点であり、このような実践を是としている。

第二に、構成（築）主義の立場をとっており、教科書の定型的授業を否定している点である。資料⑤では、授業のねらいに関して「授業以前の認識が授業行為を経ていかに変容するかが授業の目当て」としている。ここから、構成（築）主義的な考え方をとっていることがわかる。このような立場から、教師は子どもの試行錯誤の支援者であり、「子どもを早熟な市民と捉え、文化財や教育的環境に働きかける社会的経験を重視して構想することも可能である」[v]としている。

第三に、授業づくりにおいては教材、特に実物教材を重視している点である。資料⑤では、授業の三要素の第一に教材を位置づけており、授業構成においては「学習者の意欲を喚起する教材・教具を優先して教授行為を構想し、その学習活動に即して教育内容を決めていく＜下からの道＞があってもよい」[vi]という考え方を示している。さらに、その教材は教科書などにある教材を深める「教材解釈」に留まらず、独自の教材を開発する「教材づくり」をする必要があること、そのために教師に求められるのは学問研究の力量であるとしている。さらに教材は可視的な具体性が求められるとし、資料⑦でデールの「経験の円錐」を用いて、実物教材（モノ）の有効性を示している。資料⑧では授業の導入時に実物教材や視聴覚教材を用いて工夫できるとしている。資料⑨〜⑩の各論でも、実際に授業で用いる教材を示している。

以上の３点から、本書の内容の特徴を確認してきた。ここから、テキストの教科観・思想についてまとめる。まず、授業の目当ては早熟で未熟な市民である子どもの認識を変容することである。その際は、教師は子どもの試行錯誤の支援者であり、教材を通して子ども自らが学びを通して社会や歴史をみる力、考える力をつける構成主義的な考え方である。さらにその教材は、教科書などにない独自に開発したものを用いて、授業の導入や展開で臨機応変に対応してうまく活用する必要がある。

（３）目指すべき教師像

以上、（１）（２）で確認してきたテキストの理念・構成・教育観から、目指すべき教師像をまとめる。

第一に、学問研究の力量を活かした教材研究によって、独自の教材を開発できる能力である。

第二に、子どもの認識を変容させる授業づくりができる能力である。そのためには、教授法や子ども理解も必要である。

第三に、テクニック的授業実践力である。資料⑧では、導入、展開の工夫について、実物教材や CM を挟むことなどが示されており、テクニック的な思考がみられた。

第四に、よい授業にふれ、学びとれる能力である。資料⑥では、民間教育団体の研究会などの授業実践の報告にふれ、その実践から学びとっていくことの重要性を伝えている。

以上のように、本書の目指すべき教師像が明らかになった。その教師像のなかでも、本書が育成しようとしているのは、理念や構成から捉えると、教材開発力であると考えられた。よって、RA は以下のように整理できる。

RA①:便利で手軽な実践の手引書としての性格が強い『ハンドブック』は、教材開発力の育成に力をいれており、その背景には深い教材研究によって成り立つ活動的教育による市民教育という教育観が存在する。

RA②: 早熟で未熟な市民である子どもの認識を変容する授業づくり、それに必要な教材を独自に開発できる教師像

3.　その指導者に求められる資質・能力（考察）

第３章では、教師教育者はこのような教師を養成するためにどのような資質・能力が求められるか、このテキストをうまく使うための資質・能力とは何かについて考察する。主に２点述べたい。

第一にある程度の実践力を備えた実践経験のある教師教育者である必要がある。教材研究・開発の具体的な手法や注意点などは、ある程度の経験のある教育者でしか分からない。授業づくりを見据えた教材開発をするには、その授業の具体的イメージがみえる必要がある。実践経験の無い教科教育学などの研究者は、その授業の分析や教育的意義については指導できるが、実践のための知識・技能といった「教材研究の実践力」的な面での指導力は不足していると考える。

第二に、この教育論の有効性について大学生に対して納得させる能力である。本書で示されている教育観や教師像は、数多くある社会科教育論の中の一つである。目標論から考

える社会科教育や、子どもの実態から考える社会科教育ではなく、教材研究から考える社会科教育の有効性について、授業分析によって大学生に伝える必要があるだろう。そのためには、現場での経験だけでは十分ではなく、複数の授業理論を把握しており「aim talking」のできる実戦経験者である必要がある。

4. おわりに

最後に、今後の発表につなげるため、本発表をする上で生じた疑問について提示する。その疑問は、本書は教師教育用の教材といえるのか、という点である。本書の中では、「教材開発を軸とする授業開発力のある教師」が教師像として目指されていることが示されてはいるが、その教師を育成するための教材となっていると言えるのだろうか。もし、このような教師を育成するための教材であるならば、教材研究の仕方や教材開発の注意点などについての説明や、各論で示されているヒントやアイデアからどのように具体的な指導案として授業づくりをすればよいのか、についての説明があるべきだろう。しかし第２章（１）で確認したように、本書はハンドブックとしての性格がつよく、「How to」「idea」が示されているだけである。その「ヒント」からどう指導案化、授業化すればよいかは本人に委ねていることのメリットもあると考えられるが、本書がもし真の授業開発力のある教師を育成するための教材ならば、その「How to」「idea」をどう活かせば授業づくりにつなげるのか、という技法までも示すべきではないだろうか。

本書は教科観・教師観は捉えられたが、教師教育観がみえにくかった。今後の発表で様々な教員養成用テキストを分析することで相対的に捉えることでみえてくるかもしれない。

【参考文献】

二谷貞夫・和井田清司編『中等社会科の理論と実践』学文社,2007,pp.1-176
森分孝治・片上宗二編『社会科重要用語 300 の基礎知識』明治図書,2000,pp.1-317
日本教育方法学会編『教育方法学研究ハンドブック』学文社,2014,pp.1-444

---

[i] p.1
[ii] p.1
[iii] p.1
[iv] p.14
[v] p.16
[vi] p.16